

# 会話作成タスクにみるハズダの学習上の問題点

—適切な運用のために必要な文法記述を考える—

太田 陽子

【キーワード】 ハズダ 使用意識 発話意図 場面 教育文法

## 1. はじめに

ここ数年、日本語教育に役立つ文法（＝日本語教育文法）のあり方をめぐる議論が活発になっている。これまでの日本語教育文法は、「日本語学の成果としての文法を教育現場に応用する傾向」が強く、「実際のコミュニケーション活動に直結しない抽象的な文を作る能力を重視するものが多かった」<sup>1</sup>といった批判のもと、学習項目の見直しや、技能別の文法などが提案されてきている。本稿もまた、そうしたコミュニケーションのための文法記述をめざす試みの一つである。ただし、学習者にいつ何をどのように与えるのかということを考える前に、教育のために貢献する文法記述とはどのようなものなのか、現行の文法記述自体を運用面から捉えなおすことこそが教育文法のあり方を考える上では必要だと考える。そのためには、学習者の理解の様子に寄り添った観察と分析が不可欠であろう。

このような問題意識から、本稿では、ハズダという項目を例に、中国人日本語学習者（以下、「学習者」）と日本人母語話者（以下、「母語話者」）に対して行った会話作成タスクの比較検討を通し、学習者の学習上の問題点を洗い出すことで、学習者に必要でありながらこれまで考慮されてこなかった情報に目を向けることを目的とする。こうした分析を通じて、これまでの文型指導にはどのような視点が欠けていたのかをとらえ、教育文法のあり方を考える試みとしたい。

## 2. ハズダに関する先行研究と教育現場における扱われ方<sup>2</sup>

ハズダを用いた表現（＝以下、ハズダと記す）については、高橋（1975）において「予定や推定などきまりやたしかさのみこみを表す用法」と「ナルホドソウイウワケダという道理のさとりを表す用法」の2種類の用法が指摘されて以来、多くの研究が行われている。特に、モダリティ研究の中では、「かもしれない・にちがいない」等とともに、認識のモダリティの中の蓋然性を表すものとして扱われ、その特徴として、「何らかの根拠によって、話し手がその事柄の成立・存在を当然視しているということを表す」（日本語記述文法研究会（2003）：p. 161

下線は本稿筆者) ものとして説明されている。

これらをふまえ、日本語教育のための教材や文法解説書においても、以下のよう  
に、日本語学における研究成果とほぼ同様の説明がなされている。

(1) …… the speaker implies that he/she has grounds to think so, that  
it is his/her own judgment and that he/she is quite sure of it. (み：  
p. 129)

(2) 「はずだ」と「にちがいない」は話し手が確信している事柄を表す表現  
です。両者の意味はよく似ていますが、「はずだ」は論理や既存知識に基  
づいて考えた結果得られた確信を示すのが基本であるのに対し、「にちが  
いない」は直感的な確信も表すことができます。(庵ほか 2001 : p. 210)

そして、教科書においては、主に初級後半～中級前半の時期に、「根拠」を挙  
げて判断を下すことを想定した、以下のような練習が中心的に行われる<sup>3</sup>。

(3) A : 鈴木さんは、まだいますか。 <かばんがある>

→ かばんがある から まだいるはずです。(SFJ)

(キューとなる根拠を「から」節で挙げ、後件を考えて述べる)

また、中級後半から上級になると、モダリティ表現として、「だろう・かもし  
れない・にちがいない」などと共に整理されて再提示されることも多い。「わけ  
だ・ものだ」などと共に、「形式名詞+だ」の文末表現として整理されることも  
ある。いずれの場合も、ハズダは「根拠からの推論」であり、「話し手の確信」  
であるということが取り立てて提示される。

一方、ハズダには、「みこみ/予定/記憶/さとり/事態の正当性(食い違い・  
おしつけ)/理想上の事実成立」(岡部 1998) 等というように、様々な用法があ  
ることがこれまでの先行研究では指摘されている。さらに、ハズダは、疑念や不  
審、非難、期待、要望、など「言外の意味を多様に持つ文である」(原田・小谷  
1994) ことにも注目すべきである。しかし、教育現場における練習では、こうし  
た表現性の広がりや談話展開が十分に考慮されているとはいいがたい。

太田(2004)では、教科書中のハズダの用例・練習について、異なった用法が未  
整理のまま混在したり、一文単位での例示でコミュニケーション上の機能が不在  
であったりすることの問題を指摘している。ハズダを適切に使用していくため  
には、現行の教材のように、「～から」を使って根拠を述べ、それに基づいた自分  
の判断を提示する練習を繰り返し行ない、「根拠に基づく話し手の判断」という  
文型の意味を理解させるだけでは十分ではない。実は、学習者にとっては、こ  
のように根拠を述べて判断を提示すること自体が難しいのではなく、どんなとき  
にハズダを用いて自らの判断を提示し、また、それによりコミュニケーションの機  
能として何を行うのか、ということがわかりにくいのではないだろうか。次章か  
らは、学習者が作成した文や会話の分析を通して、ハズダの意味を十分に理解し  
ていながら適切に使えない例を観察し、その背景を探っていくことにする。

### 3. ハズダ構文の運用力調査——「文／会話／作文」作成タスクを通して

#### 3.1 調査概要

学習者は、ハズダをどのように理解し、運用上、どんな点に困難を覚えるのであろうか。そうした実態を見るために、中国人学習者 53 名と日本人母語話者 52 名を対象に「Ⅰ. 一文作成タスク Ⅱ. 会話作成タスク Ⅲ. 文章作成タスク」からなるタスクシートを配布し、その回答をもとに、必要に応じてフォローアップ・インタビューを実施することにより、ハズダの使用意識を探った<sup>4</sup>。学習者は、いずれもハズダという項目が既習の日本語能力試験 1～2 級受験者レベルを対象にした。ここでは、そのⅠとⅡの結果を分析し、その傾向を観察していく<sup>5</sup>。

#### 3.2 「誤用」の判断と正答率

本稿では、ハズダをどのような場合に用いるかに焦点を当てた観察を行う。従って、(4)(5)のような接続の形式や前接するテンスの問題といった文法的な形式上の誤りについては分析対象とはしない。

(4) 彼は歌が上手だはずです。<sup>6</sup> (←「上手なはずです」)

(5) 先週、紹介するはずと思うが。(←「紹介したはずだ」)

一方、(6)のような場面でハズダが用いられた場合は、形式的な誤りがなくとも、「不適切な表現」であると考ええる。

(6) A: 今週、旅行しませんか。

B: いいえ、時間がないから行きません。? 来週、テストがあるから、週末はうちで勉強するはずだ。

(6)で話し手が意図するのは、本人の意志であり、「～つもりです」や「勉強しようと思っています」といったことである。本稿では、こうした「運用上の不適切さ<sup>7</sup>」について着目していくことにする。

このような立場で今回の調査結果を分析すると、まず、一文作成と会話作成では正答率に大きな差があることが確認された。その誤用の内訳を見ると、形式上の誤りの割合はそれほど数値に差がないにもかかわらず、会話作成タスクでは、運用上の誤りが大幅に増えていることがわかる。

【表 1】中国人学習者の一文作成と会話作成の正答率 ※会話作成タスクは重複あり

	正答	形式上の誤用 <sup>8</sup>	運用上の誤用
一文作成タスク (53 例)	38 例 (71.6%)	9 例 (17%)	6 例 (11.5%)
会話作成タスク (146 例)	60 例 (41.1%)	22 例 (15.1%)	72 例 (49.3%)

つまり、今回の調査対象者である学習者は、一文単位であれば適切な文が作れる力のある程度持っているが、それを適切な場面で適切な表現として運用していく際には、問題を抱えていることが多いということである。以下に、その問題となる原因を観察していくことにする。

## 4. 一文完成タスク<sup>9</sup>における問題点

### 4.1 一文完成タスクの結果の概要

本章では、まず、一文作成タスクにおいて観察された傾向について述べる。前章で見たように、「PだからQはずだ」の形による一文作成においては、70%強が自然な文を作成しており、ハズダという表現自体は概ね理解されていたといえる。運用上の誤用としたものは、例えば、以下のようなものである。選択されるべき表現を（ ）内に記す。

(7) ?私は日本語を勉強しているから、日系企業で働くはずです。(→つもり)

(8) ?先生がわざわざ東京からいらっしゃったから、アンケートに協力するはずです。(→べきです/当然~します)

(7)(8)の学習者に意図を確認すると、いずれも、から節の理由を根拠に、当然だと考えられる選択だからハズダを用いるのだという説明をしていた。ハズダの「当然性」が、時に個人的な選択や当為性へと拡大解釈されていることがわかる。

一方、ハズダは常に文末であるとは限らないことを考え、「はずだから/はずなのに」といった、ハズダが節の中で用いられる表現についてもタスクを行ったところ、文末にハズダを使用する例に比べ、正答率が下がることがわかった。

【表2】一文完成タスクの問題別正答率

	～から～はずだ	～はずだから～	～はずなのに～
正答率	38例 (71.6%)	25例 (47.2%)	21例 (39.6%)

「ハズダ」「カラ」「ノニ」のそれぞれの表現を知っていても、それらを組み合わせさせた表現は使いこなすのが難しいことがわかる。実は、次節で見るように、これらは「ハズダ」と「カラ/ノニ」の単純な組み合わせではなく、ある種の傾向を持って使われる表現であることが、母語話者の回答から示唆される。現在も、ハズダが含まれる「ハズダッタ」や「ハズガナイ」といった表現については、ハズダとは別に取り上げて練習されることがあるが、こうした表現についても、それぞれの形ごとに練習することが考えられてよいのではないか。

以下、「ハズダカラ」と「ハズナノニ」の使用意識について簡単にまとめる。

### 4.2 ハズダカラの使用意識

ハズダカラは、単純にハズダとカラをつなげれば成り立つとは言えないようだ。

(9) ?できるはずだから、この専門を選びます。

(10) ?彼はうそをつくはずだから、私は彼の話を信じられない。

この文の作成者の意図によると、(9)は、「(根拠) 私にはきっと日本語の習得ができるはずだ。→ (判断) だから、日本語を専門に選ぶことにした」、(10)

は、「(根拠) 彼のような性格の人物はいつもそをつくはずだ。→ (判断) だから、私は彼の話信じません」ということであり、「ハズダ」「カラ」それぞれの意味自体には間違いはない。しかし、これらは非文というわけではないが<sup>10</sup>、どこか落ち着きが悪い文に感じられはしないだろうか。おそらく、上記のような発話意図の場合は、ハズダを使わずに、例えば以下のように表現するのではないか。

(11) きっとできると思い、この専門を選ぶことにした。

(12) 彼はいつもそをつくから／彼はうそをつきそうだから、私は彼の話信じません。

実は、ハズダカラという表現が使われる状況には、一定の傾向が見られるようである。【表3】は、母語話者と学習者の作成した文の後件の種別とその人数である。これを見ると、母語話者は、ハズダカラという表現を使って、ハズダで述べる自分の確信を根拠に、(13)のように「だろう」と何かを推測するか、(14)のように「～しよう」と相手に行動を促す例が多いことがわかる。

(13) 彼は他の用事があるはずだから、今日は来ないだろう。

(14) まだ終電はあるはずだから、もう少し飲もう。

【表3】ハズダカラの後件にくる表現例 (日本人 52 例 中国人 50 例中)

	日	中		日	中		日	中
だろう	14	0	勧め(～ばいい)	3	0	なければならない	1	1
(だろう以外の) 推測	2	5	～たほうがいい	0	6	～できない	2	3
～(し)よう	14	1	大丈夫・必要ない	7	7	単なる叙述	2	14
～ください/なさい	7	9	自分の心情	0	5			

また、それ以外でも、「～してください」と相手に依頼したり、「大丈夫だ・心配ない」と相手を安心させるなど、相手に働きかける表現がほとんどであり、単なる叙述はわずか2例に過ぎなかった。

一方で、学習者の例を見ると、母語話者に多かった「だろう」「しよう」と共に使われる例は1例のみであり、次のような単なる叙述が続く例が多い。

(15) 彼は出かけたはずだから、家の電話に出ない。

(16) 彼女はこの問題を解けるはずだから、彼女を頼んだ。

こうした傾向の違いは、「なんのためにハズダを用いた判断を示すか」という構文使用動機に関わっていると考える。母語話者に比べて、学習者には、ハズダを用いて何をするかという動機が明確ではないのではないかとすることが示唆されよう。ハズダカラという表現をひとまとめにとらえ、後件によく用いられる共起表現とともに紹介することは、運用力を高める一助になる可能性がある<sup>11</sup>。

#### 4.3 ハズナノニの使用意識

ハズダという表現が、予想と現実との食い違いを表すことがあることは、森田(1980)を始め、先行研究でもしばしば指摘されている。

(17) もうそろそろバスが来るはずだが、遅いな。(森田 1980)  
 ハズナノニという表現は、そうした食い違いを、(18)のように前件と後件で対照的に表すことが多い表現である。

(18) 彼は知っているはずなのに、知らないふりをしている。

実際、母語話者の作成した文は、すべて前件と後件が対照的な状況となっていた。ところが、学習者の作例には、そうでないものも含まれている。

【表4】ハズナノニの使用状況

対照性あり	日	中	対照性なし	日	中
直接的な対照性	38	27	対照性なし	0	9
付帯状況 <sup>12</sup> との対照性	14	10	ノニの意味の誤用・無回答	0	4

(19) 彼は忙しいはずなのに、電話をかけたい。

(20) 合格できるはずなのに、やはりいい点数がほしい。

それぞれの意図は、「恋人は今、きっと忙しいはずだ（そのことはわかっている）。なのに、どうしても電話をかけたい」「きっと合格できるはずだ（そのことはわかっている）。なのに、やはり点数のことが気になる」ということであった<sup>13</sup>。ハズナノニについても、ハズダとノニをそれぞれ扱うのではなく、ハズナノニという単位で導入し、ハズナノニの持つ予想と現状の食い違いという表現性をもっと積極的に学習者に提示して練習してもいいのではないだろうか。

## 5. 会話作成タスクにおける問題点

### 5.1 会話作成タスク<sup>14</sup>の結果の概要

次に、学習者が作成した会話例について、母語話者と対比させながら、考察していくことにする。3.2 節で見たように、ハズダという表現の意味を理解していると思われる学習者も、会話場面の中で運用しようとする適切な使用できないことがある。その原因は、大きく以下の三つの点にあると言える。

まず、学習者の作成する会話では、「はずだ・はずです」という文末言い切りの形が多く、母語話者と比べて、副詞や終助詞、接続助詞と共に用いられる例が少ない<sup>15</sup>。そのために、表現意図が適切に伝わらず、不自然な会話となることがあるようだ。教育現場では、共起しやすい表現と共に、「実際に使える形で」提示していく必要があることが示唆される。

次に、母語話者の作成した会話は、学習者のものよりも、不審や非難を表したり、説得や励ましを行ったりという、発話の伝達効果がはっきりとしたものが多いが、学習者にはハズダの伝達効果が不明瞭なままの使用が見られる。また、本来はハズダが用いられにくい場面で、意図を誤解した使用も時に見られた。これらは、ハズダを用いて何をするのかというコミュニケーション上の機能が十分に理解されていない結果、生じる傾向ではないかと考える。

また、ハズダではなく、「じゃないか」や「つもりだ」などの他の判断表現を

用いるほうが適切な場面も多く見られた。類似した表現性を持つ表現との使い分けをどう教えていくのかということについても検討の余地がある。特に、これまでのハズダに関する先行研究では、「にちがいない」や「かもしれない」等と比較されることが多かったが、学習者が混同するのは、もっと広範囲で多彩な表現との使い分けではないかという問題が提起されるだろう。

以上が、会話作成タスクを通して観察される運用上の問題点である。以下に、それぞれについて、具体的にみていくことにする。

## 5.2 共起表現に見る傾向

【表5】は学習者と母語話者の作成した会話例の中で、ハズダがどのような形で用いられたかを見るため、ハズダに後接する表現をまとめたものである。学習者の会話では、後接の表現があるものが50例、ないものが84例と、ハズダが単独の言い切りの形で用いられることが多いのに比べ、母語話者では、後接の表現があるものが109例、ないものが39例と、何がしかの表現を後接させて使用する傾向がはっきりと見られる。また、学習者の使用する後接表現は、圧倒的に終助詞「よ」であるが、母語話者では、「よ」の他に、「はずなのに」「はずなんだけど」等の逆接や、「はずだから」などの形も使われやすい。

【表5】ハズダに後接する表現 日本人用例数 全148例 中国人用例数 全134例

	日	中	具体的な表現例
後接表現あり	109	50	
終助詞「よ」	34	24	
終助詞（「よ」以外）	9	10	ぞ・ね・もん・よな・よね・か
逆接表現	21	6	が・けど・のに・のになあ・
と思う	4	4	と思うのですが・と思ったのだけど・とっていたよ
だろう・でしょう	4	2	だろう・だろ・でしょう・でしょ
だから・し（理由）	11	1	だから・し
ノダ+逆接	20	1	んだけど・んだけどな・んですが・んだが・んですけど
ノダ（+逆接以外）	2	0	んだ・んだよ
その他	4	1	じゃないか・って・の
後接表現なし	39	84	
～はず。	6	0	

ハズダは、会話で用いる場合には、言い切りの形では不自然になりがちである。

(21) A：あの人は日本で留学したことがありましたよ。

B：そうですか。日本語が上手なはずだ。

A：そうではありませんよ。彼は書くのは上手ですが、話すのは全然だめです。

B：そうですか。

(21)では、見込みを語るのであれば、「それじゃ、日本語が上手なはずですね」、

納得を表すのであれば「道理で日本語が上手なはずだよ」などの形で用いなければ、適切な発話意図が伝わらない。現行の教科書では、「はずですよ」の形が導入される程度で、練習の多くが(3)で見たように、言い切りの形で行われているが、会話の中で適切に使用していくためには、「はずなんだけど。(知りませんか)」「はずなのに。(おかしいな)」「はずだから、(～しましょう/してください)」のように、発話の意図と共に共起する表現を合わせて提示していく必要がある<sup>16</sup>。

また、後接する表現だけでなく、【表6】に見られるように、ハズダの前に現れる接続助詞や副詞、接続詞にもハズダと共に使用されやすいものがある。例えば、「でも」という接続詞は、相手が自分の想定と異なる見解を出した際に、「でも、～はずだよね」という形で反論する場面で、ハズダと共に使われやすいようである。一方、不確かな記憶を表す「確か」などは、母語話者では8例見られるが、学習者には見られず、代わりに「必ず・きっと」など、確信を表すものに集中しているという傾向も見られた。

【表6】ハズダと共に用いられる接続助詞・副詞・接続詞<sup>17</sup>

接続助詞	日	中	副詞	日	中
から・ので	5	36	確信を表す(必ず・きっと、絶対、絶対に、確かに)	5	11
たら	4	4	不確かな記憶を表す(確か)	8	0
なら	2	4	接続詞		
ば	9	6	でも	4	5

ただし、留意すべき点として、学習者に「から・ので」の使用が際立って多いことが挙げられる。現行の教科書の練習が、(3)に代表されるような「Pだから、Qはずだ」の形で行われることによる影響で、固定化が起こっている可能性がある。事実、(22)のような会話を作成した学生にその意図を尋ねると、「理由があって判断したから、ハズダを使う」と答えた。

(22) A: 日本のドラマが好きですか。

B: 発音がとてもきれいで、礼儀正しいから、好きなはずですよ。

共起表現をセットで示すことは過剰使用につながることもある。様々なバリエーションを意識し、それぞれの発話意図を明確にした上で、慎重に提示していかなければならない。

### 5.3 発話意図に関する傾向

今回の調査では、【表7】に見られるように、ハズダの3つの主な用法(「みこみ」、「想定との食い違い」、「さとり」)のうち、母語話者では「みこみ」と「食い違い」の用法がそれぞれ約半数ずつ見られるのに対し、学習者には「食い違い」の用法があまり見られない傾向があった。また、

【表7】ハズダの使用場面

	日	中
みこみを語る用法	87	123
想定との食い違いを述べる用法	83	15
さとり(納得)の用法	3	0
いずれとも判定不能	0	6

母語話者の作成する会話は、(23) (24)のように、自己の見込みを判断の根拠としたり、自分の想定との食い違いを表して不審の意を表したりと、ハズダの機能がはっきりと感じられる例が多いが、学習者の作成した会話の多くは、(25)のように単に自らの考えを述べるにとどまり、ハズダの使用動機があいまいなものも少なくない。

(23) A: ねえ、お父さん、お母さんは？

B: 買い物に出かけたぞ。

A: 何時に帰るって？

B: 近くのスーパーのはずだから、そろそろ帰るだろ。

(24) A: お財布が見当たらないの。

B: どこに置いたの？

A: カバンに入れたはずなんだけど…。

B: 机の上にあるじゃないか。

(25) A: 張さん、久しぶりですね。3年ぐらい日本に住んでいましたから、日本語が上手なはずですよ。

B: いいえ、まだまだです。呉さんは自分の会社がありますよ。今、お金持ちになるはずですよ。

A: いいえ、まだまだです。今、一緒にビールを飲みませんか。

B: はい、いいですよ。

さらに、一文単位では問題がないものでも、ハズダの発話意図に合わない場面で使用される例もしばしば見られた。

(26) A: どうしたんですか。

B: 頭が痛いです。

A: それはいけませんね。薬を飲めば、病気はすぐに治るはずですよ。

B: ありがとうございます。

(26)の例は、教科書に出てくる例文そのままの文であるが、ここでの発話意図は、「薬を飲んだほうがいいですよ」という助言である。この文脈で「～ば～です」を用いてしまうと、例えば薬を飲んでいない聞き手に対しては、冷たく非難めいて聞こえてしまう可能性もある。

(27) A: 田中さんは明日の会議が出席しませんね。

B: え～、どうして。

A: さっき電話がかけてきた。明日は用事があるので出席しないはずだ。

B: そうですか。

この例も、教科書の例文とほぼ同じものである。しかし、ここでの発話意図は、伝言することにより、「～そうです」が使われるほうが適切である。電話で来ないと伝えてきたことを単に報告する文脈では、ハズダは用いられない。多くの教科書の練習で用いられている場面であるが、ハズダを用いる動機がわかりにくい

ものとなっている可能性がある。

(28) A：林さんは、今どこにいますか。

B：教室にいるはずです。

A：そうですか。でも、今、いません。

B：そうですか。寮へ帰ったはずです。

この例は、もしも最初のやりとりだけであれば、問題はない。しかし、想定が違っていたことがわかり、続けて、「(根拠) 教室にいない→(判断) では寮だ」と推測したとしても、本来、話者が確信していることを述べるはずで、異なる判断を連続で述べることは、いい加減な印象を与えかねない。

(29) A：明日、暇ですか。

B：うん、都合がいいはずです。

A：僕は遊園地のチケットを持っているので、一緒に行かない？

B：うん、できるはずです。

この学習者は、ここでのはずダの使用動機を、「明日のことだから断定はできないが、“ぜひ、もちろん”の気持ちで述べたいので、はずダにちょうどいい」と答えた。しかし、結果として、反対に不確定で無責任な発話となってしまっている。

フォローアップ・インタビューでは、いずれも、学習者ははずダの意味するところを自分なりに理解した上で、強い動機で使用していることが見受けられた。しかし、実際には、はずダでは表し得ない発話意図であった。教育現場では、はずダを運用するために必要な情報として、文型の意味だけではなく、はずダで何ができるのかといった意図や伝達効果を明確にした様々な具体的な場面をもっと積極的に提示していかなければならないと考える。

#### 5.4 「類義」表現の多様性

今回の調査で学習者がはずダを使用した場面では、より適切な表現が想定されるものや、他の表現との混同が見られる場合も多かった。例えば、

(30) 学生は勉強するはずだから、遊んでばかりはだめだ。(→べきだ)

という場合、「学生である」ということから、「当然、勉強する(はずだ)」という判断が導かれているのであるが、ここでは、「そうしなければ(あり方として)正しくない」という価値判断が行なわれているため、「べきだ」が適当であろう<sup>18</sup>。

【表8】は、今回の調査で得られた、はずダに代わる各場面でのより適切な表現のリストである<sup>19</sup>。この表から、学習者にとっては、様々な表現がはずダと類似したものとして候補に挙がることがわかる。

表現の産出にあたっては、こうした様々な可能性の中から、もっとも適切な表現を選び取らなければならないのである。これまで、はずダは主に「かもしれない・にちがいない」との使い分けが論じられてきたが、学習者のために役立つ情

報としては、ハズダを用いないゼロ(φ)形式の表現も含め、より広く類義表現を設定していく必要があるだろう。

【表8】より適切な言い換え例

モダリティ不要(φ)	28	だろう・でしょう		なければならない	1
副詞+φ (いつも・きっと・たしか・ たぶん・当然・もちろん)	18	だろうと思う	14	のは当然だ	7
		にちがいない	8	べきだ	13
		ことになる	1	ものだ	3
うと思っています 予定です つもりです	7	ことになっている	1	ようだ・みたいだ	13
		そうです(伝聞)	2	んじゃないか	6
		と思う	10	んじゃないかと思う	
たほうがいいですよ	4	ていた	1		
かもしれない	1	とわかっている	3		

## 6. まとめ

本稿では、学習者が文型の「意味」を理解していても適切に使えない背景には、使える形で教えていない教育の現状があるのではないかとの問題意識から、学習者と母語話者の作成した文および会話例の検討を通して、現行の文法記述に欠けている視点を探ることを試みた。その結果、「ハズダカラ／ハズナノニ」といった固定した形式や、発話意図に合わせた共起表現などを積極的に取り入れていくべきであることや、ハズダという表現の使用される文脈的条件、特にハズダを用いて何をするのかという発話意図をもっと重視すべきであること、「類義」表現として想定されるものをより広範囲に捉えていくべきことなどが観察された。今回は、調査対象者の人数も十分ではなく、あくまでも傾向を見るにとどまっているが、現在、調査の規模を拡大し、中国人以外の学習者についても分析を試みている。また、今回は言及できなかったが、同調査で収集した作文をもとに、文章構造における傾向についても考察を進めていきたいと考えている。

付記：本研究は平成17年度文部省科学研究費補助金（若手研究B「運用力につながる文法記述のための基礎研究」課題番号：17720129）による調査の一部である。

## 注

- 1 野田ほか(2003：p.17)より。
- 2 日本語教育におけるハズダの文法説明・練習問題の傾向とその問題点については、太田(2004)を参照されたい。
- 3 太田(2004)で分析されている初級、初中級の7種類の教科書すべてにこの形式の練習がある。また、同稿によれば、初級の用例・練習における59%が、「カラ(理由)節」を伴った文で提示されている。

- 4 調査の実施時期と場所は次のとおり。2005年4月／東京／日本人母語話者（社会人）13名。10月／中国・蘇州／中国人学習者43名。11月／東京／日本人母語話者（大学生）39名。12月／東京／中国人学習者（留学生）10名。
- 5 IIIについての分析は紙幅の関係上、別稿に譲ることにする。
- 6 特に言及しない限り、本稿の用例はすべて今回の調査で得られたもの。文法的な誤りなども原則としてそのままの形で載せる。
- 7 したがって、その表現が「不適切」であるかどうかは、原則として、その都度、発話意図を確かめない限り、判定できないものである。本稿では、便宜上、「誤用」「不適切な表現」といった表現を使用するが、何が「誤用」であり、「不適切」かの判断には、慎重な態度が望まれることには留意していきたい。
- 8 ハズダに隣接する語の接続の形、テンス、アスペクトに限る。語彙の選択および隣接部以外（前件の節内など）での文法的な誤用はカウントしない。
- 9 問題は以下の形式の5問。①前件を与え、後件を考える ②後件を与え、前件を考える ③から節を使って、前件、後件ともに考える。④「はずだから」を使って文を作る⑤「はずなのに」を使って文を作る。
- 10 これらは「運用上の不適切さ」であるから、ある特定の文脈を想定すれば、十分に適切な文になりうる。
- 11 今回は調査数が十分でなく、傾向が示唆されるのみである。現在、この傾向を確かめるため、さらなる母語話者への調査とシナリオや論説文での傾向を分析中である。
- 12 松田(1994)の用語。
- 13 これらも注10同様、心情と現実の食い違いを十分に想定させる文脈を作りこめば適切になる場合はありうる。
- 14 このタスクは、ハズダを最低1回使って、AとBのやりとりが計4回（Aの発話2回、Bの発話2回）以上続く会話を2種類作成してもらう形で行なった。
- 15 もちろん、今回の調査は実際の発話ではなく、シートへの記入である点は考慮すべきである。しかし、同じ条件で母語話者との差が大きく出た点に注目して考える。
- 16 野田編（2005）のフォード丹羽順子氏による章でも、「～ほうがいい」という表現を例に、言語活動ごとにモダリティ表現などを伴った単位で提出すべきだという指摘がある。（p.114-117）
- 17 これらは今回の調査で観察された例であり、これが全てであるわけではない。ハズダの発話意図と共起しやすい表現については、太田（2005）を参照のこと。
- 18 中国語では、「はずだ」「べきだ」共に、「應該」という語が訳語として当てられる。
- 19 当然、表現は必ずしも1つには決まらないため、あくまでも言い換えの候補例としてのリストである。

#### 参考文献

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語

文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

太田陽子 (2004) 「文型指導における「文脈欠如」の問題点 —日本語教科書におけるハズダの導入・練習を例に—」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』17

太田陽子 (2005) 「文脈から見たハズダの機能」『日本語教育』126 日本語教育学会

岡部嘉幸(1998) 「ハズダの用法について」『東京大学国語学研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院

高橋太郎 (1975) 「「はずがない」と「はずじゃない」」『言語生活』289

日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4第8部モダリティ』くろしお出版

野田尚史ほか (2003) 「シンポジウム 新しい日本語教育文法——コミュニケーションのための文法をめざして——」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会

野田尚史 編 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版

原田登美・小谷博泰 (1994) 「「はず」の現代と近世」『甲南大学紀要・文学編』1-38

松田礼子(1994) 「「はずだ」に関する一考察—推理による観念の世界とその外に実在する現実の世界をめぐる—」『武蔵大学人文学会雑誌』26-1

宮崎和人・安達太郎・野田晴美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』くろしお出版

森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店

【本文中で引用した日本語教材】( ) 内は本文中の略号

『みんなの日本語初級Ⅱ翻訳・文法解説 英語版』(1998)スリーエーネットワーク (み)

『Situational Functional Japanese』Vol.3 Drills(1992)筑波ランゲージグループ (SFJ)  
(聖学院大学非常勤講師／早稲田大学日本語教育研究科博士後期課程)

---

<sup>1</sup>野田ほか（2003：p.17）より。

<sup>2</sup>日本語教育におけるハズダの文法説明・練習問題の傾向とその問題点については、太田(2004)を参照されたい。

<sup>3</sup>太田（2004）で分析されている初級、初中級の7種類の教科書すべてにこの形式の練習がある。また、同稿によれば、初級の用例・練習における59%が、「カラ（理由）節」を伴った文で提示されている。

<sup>4</sup>調査の実施時期と場所は次のとおり。2005年4月／東京／日本人母語話者（社会人）13名。10月／中国・蘇州／中国人学習者43名。11月／東京／日本人母語話者（大学生）39名。12月／東京／中国人学習者（留学生）10名。

<sup>5</sup>Ⅲについての分析は紙幅の関係上、別稿に譲ることとする。

<sup>6</sup>特に言及しない限り、本稿の用例はすべて今回の調査で得られたもの。文法的な誤りなども原則としてそのままの形で載せる。

<sup>7</sup>したがって、その表現が「不適切」であるかどうかは、原則として、その都度、発話意図を確かめない限り、判定できないものである。本稿では、便宜上、「誤用」「不適切な表現」といった表現を使用するが、何が「誤用」であり、「不適切」かの判断には、慎重な態度が望まれることには留意していきたい。

<sup>8</sup>ハズダに隣接する語の接続の形、テンス、アスペクトに限る。語彙の選択および隣接部以外（前件の節内など）での文法的な誤用はカウントしない。

<sup>9</sup>問題は以下の形式の5問。①前件を与え、後件を考える ②後件を与え、前件を考える。③から節を使って、前件、後件ともに考える。④「はずだから」を使って文を作る ⑤「はずなのに」を使って文を作る。

<sup>10</sup>これらは「運用上の不適切さ」であるから、ある特定の文脈を想定すれば、十分に適切な文になりうる。

<sup>11</sup>今回は調査数が十分でなく、傾向が示唆されるのみである。現在、この傾向を確かめるため、さらなる母語話者への調査とシナリオや論説文での傾向を分析中である。

<sup>12</sup>松田(1994)の用語。

<sup>13</sup>これらも注10同様、心情と現実の食い違いを十分に想定させる文脈を作りこめば適切になる場合はありうる。

<sup>14</sup>このタスクは、ハズダを最低1回使って、AとBのやりとりが計4回（Aの発話2回、Bの発話2回）以上続く会話を2種類作成してもらう形で行なった。

<sup>15</sup>もちろん、今回の調査は実際の発話ではなく、シートへの記入である点は考慮すべきである。しかし、同じ条件で母語話者との差が大きく出た点に注目して考える。

<sup>16</sup>野田編（2005）のフォード丹羽順子氏による章でも、「～ほうがいい」という表現を例に、言語活動ごとにモダリティ表現などを伴った単位で提出すべきだという指摘がある。（p.114-117）

<sup>17</sup>これらは今回の調査で観察された例であり、これが全てであるわけではない。ハズダの発話意図と共起しやすい表現については、太田（2005）を参照のこと。

<sup>18</sup>中国語では、「はずだ」「べきだ」共に、「應該」という語が訳語として当てられる。

<sup>19</sup>当然、表現は必ずしも1つには決まらないため、あくまでも言い換えの候補例としてのリストである。

#### 【参考文献】

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

- 
- 太田陽子 (2004) 「文型指導における「文脈欠如」の問題点 ―日本語教科書におけるハズダの導入・練習を例に―」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』17
- 太田陽子 (2005) 「文脈から見たハズダの機能」『日本語教育』126 日本語教育学会
- 岡部嘉幸(1998) 「ハズダの用法について」『東京大学国語学研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院
- 高橋太郎 (1975) 「「はずがない」と「はずじゃない」」『言語生活』289
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 野田尚史ほか (2003) 「シンポジウム 新しい日本語教育文法——コミュニケーションのための文法をめざして——」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会
- 野田尚史 編 (2005) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 原田登美・小谷博泰 (1994) 「「はず」の現代と近世」『甲南大学紀要・文学編』1-38
- 松田礼子(1994) 「「はずだ」に関する一考察—推理による観念の世界とその外に実在する現実の世界をめぐる—」『武蔵大学人文学会雑誌』26-1
- 宮崎和人・安達太郎・野田晴美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』くろしお出版
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2』角川書店

【本文中で引用した日本語教材】( )内は本文中の略号

『みんなの日本語初級Ⅱ 翻訳・文法解説 英語版』(1998)スリーエーネットワーク(み)

『Situational Functional Japanese』Vol.3 Drills(1992)筑波ランゲージグループ (SFJ)

(聖学院大学非常勤講師／早稲田大学日本語教育研究科博士後

期課程)